

## [12] 日向市小学校体育連盟

(学校数13校 児童数 2,771人)

### I 年間事業

実施日	事業名	主な内容	会場
4月15日(火)	市小体連第1回理事会	役員選出・年間計画	市教育研究所
6月24日(火)	市小体連第2回理事会	陸上記録会について 研究の進め方について	市教育研究所
12月1日(火)	市小体連第3回理事会	陸上記録会の確認 研究について(指導案検討)	市教育研究所
12月19日(金)	市小体連第4回理事会	研究授業参観・事後検討	美々津小学校
2月【未定】	市小体連第5回理事会	来年度について	市教育研究所

### II 事業部のあゆみ

#### 1 陸上記録会

- (1) 大会名 令和7年度日向市小学校陸上記録会
- (2) 実施日 9月～11月
- (3) 会場 各校グラウンド
- (4) 出場者 日向市内小学校6年生全児童 (小規模校は5年生児童含む)
- (5) 実施種目  
○ 走り高跳び ○ 走り幅跳び ○ 50mハードル走  
○ 短距離走(100m) ○ リレー(100m×4名)  
○ 長距離走(男子1000m、女子800m) ○ ソフトボール投げ
- (6) 競技方法
  - ・ 選抜での出場はリレーを除き、1人1種目とする。
  - ・ 各校の実態に応じて、種目は選んでもよい。
  - ・ 「走り高跳び」については、ベリーロールや背面跳び等危険を伴う跳び方は行わない。
  - ・ 靴は、普段体育で使用する運動靴とする。
  - ・ その他細部については、日向市小学校体育連盟による競技規則を適用する。

#### (7) 反省

今年度から、昨年度まで実施していた市内小学校全校で行っていた陸上大会をなくし、各校での開催の陸上記録会となった。全校が集まっていた昨年度に比べ、少し物足りなさや寂しさがあったようだが、各校のそれぞれの児童が目標に向け懸命に取り組む姿が見られたようだった。反省点は、各校での開催であったため、記録に差が出ているのではないかという点が上がった。また、初めての記録会ということで前例がなく、計画等がスムーズにいかなかったと感じる。しかし、体育主任をはじめ、各校の6年担任や関係の先生方の業務負担軽減に繋がったことは間違いないと感じている。今後も記録会を続ける方向だが、さらに活気のあるものにするために、この記録会がよりよい機会となるように改善する必要がある。

### Ⅲ 研究部のあゆみ

#### 1 研究主題・副題

研究主題：運動に親しみ、自主的・主体的に学びに向かい、課題を解決しようとする児童の育成  
副題：～言語活動や情報活用の充実を図ったボール運動系ネット型の授業実践を通して～

#### 2 主題設定の理由

本市では、令和6年度より、児童が運動に親しみながら、自主的・主体的に学びに向かい、課題を解決する力を育成することを目指して、体育科における授業改善の研究を継続して行っている。

本年度は、児童が主体的に学びに向かうために必要な支援や手立て、また体育科における言語活動をより活性化させるための工夫について、さらに深く探究することとした。

加えて、宮崎県においても令和5年度から7年度にかけて、「ボール運動系ネット型」および「球技ネット型」の領域における研究が進められていることを踏まえ、本市においても「ボール運動系ネット型」の領域であるソフトバレーボールを研究の題材として設定した。

昨年度の研究成果と課題を踏まえ、児童がより一層運動に親しみ、自主的・主体的に学びに向かう姿の実現を目指すため、昨年度と同一の主題を継続して設定し、研究を深化させることとした。

#### 3 研究仮説

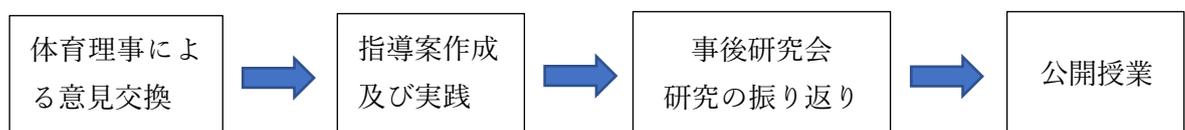
児童の実態を把握するために実施したアンケート調査の結果、「どのように動けばよいのか分からない」「運動に対して苦手意識がある」といった声が多く聞かれた。このことから、児童が活動に対して見通しをもち、意欲的に参加するためには、以下のような支援が有効であると考えた。

- ・ 模範となる動きを視覚的に提示し、動きのイメージを明確にすること
- ・ 自他の動きを振り返り、評価する機会を設けること
- ・ 他者と作戦や動きの良さについて意見を交換する場を設定すること
- ・ 上記の活動を支援するための情報やワークシートを活用すること
- ・ ICTを効果的に活用し、過去の自他の動きを容易に振り返ることができるようにすること

これらの手立てを講じることで、児童は自らの成長や課題を実感し、どのように動けばよいかを理解しながら、主体的に活動へ参加することができるようになると思える。

#### 4 研究内容

##### (1) 計画



## (2) 指導方法の工夫・改善

- ・ 児童の実態に応じた教具やルールの工夫・設定
- ・ ICTの活用による、児童が参加しやすい対話的な学習場面の構成
- ・ 自他の課題を把握し、その解決に向けた見通しをもてるような習熟・振り返りを重視した指導計画の作成

## (3) 技能向上を図るための手立てと工夫

- ・ 毎時間の発展的なドリル運動の実施や、各チームの課題に応じて選択可能なウォーミングアップの導入
- ・ 動きを通して考えを伝え合い、課題解決を図るための「作戦タイム」の設定

# 5 研究の実際

## (1) 研究に繋げるための情報共有および意見交換

研究の出発点として、授業実践者を選定し、指導による児童の変容を観察・記録する場を設けた。その中で、本市の教員が考えるICT活用の具体的な場面や、期待する教育的効果、児童に育成したい姿（ゴールイメージ）について共通理解を図った。これにより、研究におけるICTの活用や対話的な活動の場面設定、さらには児童の自主的・主体的な学びの姿を評価するための基準を明確にすることができた。

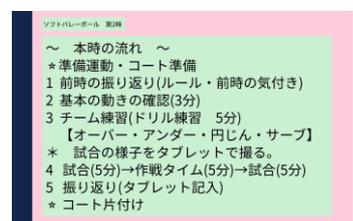
## (2) 指導方法の工夫と改善

児童が自主的・主体的に学びに向かうためには、ソフトバレーボールの運動特性や楽しさを理解し、各授業において自他の課題を意識して行動できるようにすることが重要である。また、思考力・判断力・表現力を働かせ、対話や実際の動きを通して考えを伝え合い、よりよい解決を目指す姿勢を育むことが求められる。そのために、手本となるプレーや動きのポイントを視覚的に示す資料を作成し、児童が理解しやすいように工夫した。また、運動に苦手意識をもつ児童にも取り組みやすいよう、ルールの簡略化や児童の実態に応じたルールの共同作成を各校で行い、共有を図った。

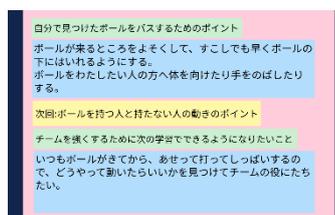
振り返り活動では、ロイロノートを活用し、「チームで協力するために必要なこと」「ボールをつなぐために必要なこと」「攻撃を成功させるために必要なこと」といった視点を明確にし、振り返り内容を蓄積することで、次時の活動に向けた見通しをもたせることができた。また、振り返りシートや手本動画の活用により、「ボールを持っている児童」「ボールを持っていない児童」それぞれの動きに意識を向けることができ、自ら声をかけたり、ボールの下に入ったりするなど、主体的な行動が見られるようになった。



【いつでも見られるお手本】



【学習の流れの見える化】



【本時と次時をつなげる振り返り】

### (3) 技能向上を図るための手立てと工夫

昨年度から継続して取り組んでいる毎時間の「帯活動」をさらに発展させ、児童が自ら選択できる活動内容を増やすことで、主体的に取り組む場面を多く設定した。たとえば、トスが苦手な児童に対しては、バスケットゴールへの玉入れを通して高さや力加減を体感させたり、レシーブ時に手の位置が揃わない児童には、リボンを使って感覚を養う練習を取り入れた。これにより、運動に苦手意識をもっていた児童も、少しずつ自信をもってボールに触れる姿が見られるようになった。

また、児童が自らの得意・不得意な動きを把握し、チームの特性を生かした作戦を考える姿や、互いに声をかけ合いながら協力してプレーする様子も見られた。話し合いの場面では、ICTを活用して仲間と意見を共有する時間と、実際の動きを通して考えを伝える時間を設けることで、意見交換が活発になり、友達の考えに共感したり、自分の考えを表現したりする姿が多く見られるようになった。



【動きを確認】

【動きのポイントを評価し合う】



【動きを実践】

## 6 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・ 児童が運動に親しみ、自主的・主体的な姿を育成するためには、単元内容に対する知識や理解を深め、「楽しい」「参加したい」と感じられることが重要である。そのために、視覚的な資料の提示や言語活動の場の設定が、児童の意欲を高めるうえで非常に効果的であることが明らかとなった。
- ・ 児童の主体性とは、単に与えられた活動をこなすことではなく、活動の中で自ら感じたことや考えたことを他者と共有し、実践することにある。そのためには、教具やルールなどの学習環境を、教師と児童が共に構築することが重要であり、作戦の成果や自他の成長を評価しやすい場の設定が有効であることが分かった。
- ・ 技能向上を図るための工夫を取り入れることで、運動に対して苦手意識をもっていた児童も、自信をもって自主的に活動に参加する姿が見られるようになった。
- ・ ICTの活用においては、ロイロノートのように直感的に操作できるツールが有効であった。選択式カードと記述式カードを組み合わせることで操作性が向上し、活動への移行時間が短縮され、学習時間の確保にもつながった。

### (2) 課題

- ・ 振り返りや話し合いなどの活動は、課題の発見や解決に不可欠であるが、「記入する」「話し合う」「実践する」といった活動を細分化することで、実際の運動時間が削られ、運動量の確保が難しくなる場面があった。そのため、作戦タイムの時間設定や導入のタイミングを綿密に計画し、活動の在り方を工夫して学習訓練を行う必要がある。特に、学年が下がるほどその調整は難しくなる傾向が見られた。
- ・ 児童が協力して課題を解決する場面と、教師が指導によって課題を解決する場面を意図的に計画し、一斉指導と個別指導をどのように使い分ける必要がある。